

ダークツーリズムにおける観光クラスター形成 —兵庫県加西市の戦争歴史遺産の事例を対象に—

細川 比呂志

キーワード：ダークツーリズム、観光クラスター、戦争歴史遺産、観光資源、地域資源、地域住民、地域経済、ダイヤモンド・モデル、官民一体、地域内観光

1. はじめに

少子高齢化の進行により労働力人口が加速度的に減少し、国内市場の縮減が急速に現実化しようとしている今、地域経済の衰退がいよいよ待たなしの状況となった。そこで、観光産業の経済効果、雇用効果への期待から、観光を地方創生の切り札として捉える自治体が益々増えてきている。地域の伝統・文化・産業・自然景観等を観光資源として活かすことによって、交流人口・関係人口を増やし、その経済波及効果で地域を活性化させることが期待されているのである。

しかしながら、実際のところ、多くの自治体が魅力ある観光資源を持ちながらも、有効な成果を上げられていない。その原因の一つには、古代から近現代までの日本の歴史や文化を今に伝える歴史遺産が有効に活用されていないことにある。これら歴史遺産は、全国各地に点在し、多くの自治体がそれらを地域の観光資源として位置づけ、活用方法を模索している。ただし、ほとんどのケースでは、それらを単体で活かそうとする点展開で留まり、他の観光資源や、観光資源以外の他の要素と結び付けての面展開としての地域全体の取り組みにはなっていない。そのため、観光客が地域全体に回遊・滞在する仕組みづくりができていないのが実情である。加えて、コロナ禍にあっては、マイクロツーリズム¹の意義が重要視され、益々、地域内観光（面展開による地域内回

¹ マイクロツーリズムとは、自宅からおよそ1時間から2時間圏内の地元や近隣への短距離観光のこと。新型コロナウイルスによって打撃を受けた観光業界を救う手段の一つとして、株式会社星野リゾートの代表 星野佳路氏が提唱した。2020年の新型コロナウイルスの流行を背景に、人の移動と「三密」を避けながら観光を楽しむための手段として注目が集まっている。株式会社星野リゾートウェブサイト「星野リゾートの「マイクロツーリズム」(<https://www.hoshinoresort.com/sp/microtourism/>)を参照。

遊・周遊型観光の推進)が求められている。どうすれば点から面展開へ移行できるのかが、観光振興を目指す自治体にとって火急の課題である。

歴史遺産といってもそのジャンルは多岐にわたる。文化遺産、産業遺産、宗教遺産、自然遺産、祭りや風習・伝統などといった無形の遺産、世界遺産や日本遺産なども含まれる。本稿では、そのなかでもダークツーリズムといわれる戦争歴史遺産に焦点を当てることとする。

井出(2013)は、ダークツーリズムについて、「戦争や災害の跡などのいわゆる“負の遺産”を観光対象としてめぐる旅であり、そこで無くなった人々の死を悼み、悲しみを共有しようとする営みである。したがってダークツーリズムの対処地となる所は、悲しみや悲劇の記憶を有した土地となる」(井出、2013、p.1)と述べている。

一見すると、このダークという言葉からマイナスのイメージを想起させ、人々が敬遠し、観光資源としての経済的効果をもたらしにくいツーリズムのような印象を与えるかも知れない。しかし、井出(2013)は、「通常、こうした悲劇の場は、人々が敬遠してしまう結果、必然的に経済的価値もあまり高くないと考えてしまうことが多い。しかし、国内外のダークツーリズムポイント²を丁寧に見ていくと、悲劇の場であるが故に、ダークツーリズムによってその地に新しい価値が与えられ、見事に生まれ変わることも多い」とその重要性を指摘している(井出、2013、p.1)。ダークツーリズムにおける戦争歴史遺産が、他の歴史遺産とは異なる特異な観光資源としての新しい価値を生み出し、その価値を、地域の観光産業の発展にどのように結びつけられるのか。

かかる問題意識の下、本稿の目的は、ダークツーリズムにおける観光地経営の在り方を、観光分野における産業クラスターの形成によって実現できることを議論し、「歴史遺産を活かした観光まちづくり」のビジネスモデルについて、特に地域内観光(地域内回遊・周遊型観光の推進)の仕組みづくりの視点から考察することにある³。

本研究は、探索的な意味合いが強くなるため、研究方法は事例研究を採用する。候補となる事例は、戦争遺産の観光資源化に取り組んでいながらもまだその効果が十分に表れていない事例(地域)であり、かつクラスター化という視点からの考察に適している事例となる。検討の結果、考察の対象地域を兵庫県加西市とした。加西市には、第一次世界大戦時に約500人のオーストリア人兵士を収容した「青野原捕虜収容所跡地」、太平洋戦争時に神風特攻隊「白鷺隊」が飛び立った「鶉野飛行場跡地」の2つの歴史遺

² 広島原爆ドームをはじめとする平和公園エリア、沖縄のひめゆりの塔や摩文仁丘、鹿児島県の知覧特攻記念館、長崎の軍艦島、世界ではアウシュビッツ強制収容所跡やチェルノブイリなどが挙げられる。KAYAKURA 地域考察メディアウェブサイト「ダークツーリズムとは何か-日本/世界における事例」(<https://kayakura.me/dark-tourism/>)を参照。

³ 本稿における産業クラスターの議論はPorter(1998)に依拠している。以下、観光における産業クラスターを「観光クラスター」と表記する。

産（戦争遺産）が存在するが、全国的な知名度は低く、観光地経営を成立させるだけの観光資源にはなり得ていない。

本稿の構成は次の通りである。第 2 節では、事例研究の対象となる兵庫県加西市について、紹介と観光の現状について説明する。第 3 節では、ダークツーリズムにおける地域イノベーションの発展過程について考察する。第 4 節では、先行事例として、鹿児島県南九州市知覧町を取り上げ、ダイヤモンド・モデルを用いて分析する。第 5 節では、第 4 節の考察結果を踏まえ、加西市について分析する。知覧町と加西市との違い、加西市に不足しているものを明らかにする。第 6 節では、加西市における観光クラスターの形成戦略の検討を行い、最後に結びとして、本稿の要約及び今後の研究課題について述べる。

2. 研究対象の紹介と現状

2-1. 加西市の概要

加西市は、兵庫県の南部、播磨平野の中央部に位置し、市域面積は 150.22 平方キロメートルで、東西 12.4 キロメートル、南北 19.8 キロメートルの広がりを持ち、東は小野市および加東市に、西は姫路市および福崎町に、南は加古川市に、そして北は西脇市、多可町および市川町にそれぞれ隣接している（図表 1）。

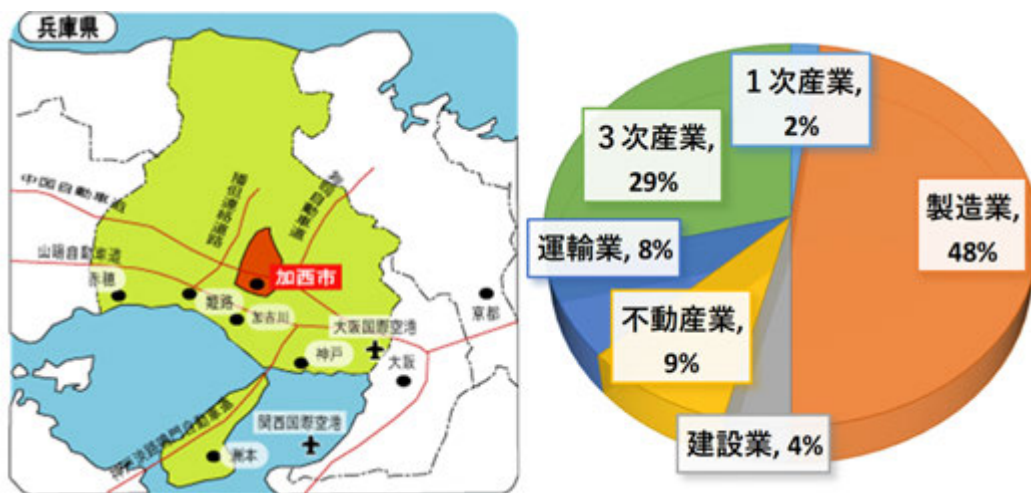
市の人口は 43,063 人（2021 年 6 月 1 日現在⁴）で、市内総生産額の構成比は、製造業が約半分の 48% を占めているのが特徴である（図表 1）。加西市は、三洋電気の創業地として知られ、協力工場として製造業が発展した。高速道路交通網の利便性が活かされ、立地企業としては金属製品や電気機械器具、汎用機械、プラスチック製品などの製造業が産業団地に集積している。中小企業が中心だが、オリジナル技術などによる製品開発により、世界的にも高いシェアを持つ企業もある。高い技術力や蓄積されたノウハウを持つ企業が多数立地しているのがその特徴である。そのため、製造業が市内全事業所数の 27%、従業者数では全体の 43% を占め、加西市は全国や兵庫県内でも製造業に特化した市であるといえる。

しかし、市内 4 か所の工業団地はすべての区画で完売しており、企業が加西市へ進出したくてもできない状況にある。また、製造業の多くが市街化調整区域・農業振興地域に立地し、法的規制により事業拡大が制限されており、既存事業のこれ以上の事業拡大は困難な状況にある。更に、現状の課題として、加西市も他の地方公共団体と同

⁴ 住民基本台帳に基づく各月の「加西市人口表」を参照。

様、少子高齢化に伴う年少・生産年齢人口の減少がもたらす労働人口の減少は、製造業の衰退を招き、それによる地域経済力の低下が懸念されている。若者流出防止と流入促進・定住促進が市のまさに課題であり、加西市には、新たな地域経済の柱の構築が求められているのである⁵。

図表 1：加西市位置と市内総生産の構成



出所：図左は、加西商工会議所ウェブサイト、図右は「加西市の産業の概要」（加西市産業振興計画 平成 29 年 1 月版）を元に筆者作成。

2-2. 加西市の観光の現状

加西市には、前述した「青野原捕虜収容所跡地」「鶉野飛行場跡地」の2つの戦争歴史遺産が現存する。また、市内には兵庫県歴史的景観形成地区に指定された「西国街道北条の宿」も現存する。その他、平安時代に建立され国宝に指定されている「法華山一乗寺三重塔」や「玉丘史跡公園（玉丘古墳群）」「五百羅漢」、明治時代からつづく酒蔵「富久錦」や「三宅酒造」、大正時代からつづく醤油蔵「高橋醤油」等、魅力ある観光資源が点在している。また、大都市近郊にありながら日本の原風景といえる田園やため池や、里山等の自然環境が残り、瀬戸内式気候といわれる温暖な気候と相まって、豊かな土壌を生み出し、品質の高い農産物⁶が生産されている。また、当市には、約4,500種の草花が植えられている全国有数の植物園である兵庫県立フラワーセンターがあり、

⁵ 「加西市の産業の概要」（加西市産業振興計画 平成 29 年 1 月版）を参照。

⁶ 気候条件がよく、広大で優良な農地が広がる加西市では、米、トマトなどの野菜、葡萄や苺などの果物、花卉などを生産している。

年間約 20 万人が訪れる市内一番の集客施設となっている。更に、市内を走る、鉄道ファンに人気のローカル鉄道「北條鉄道」も加西市の重要な観光資源である。

これら固有の魅力ある歴史資産や地域資源、観光資源が存在するにもかかわらず、市が取り組んでいる「戦争歴史遺産を活かした観光まちづくり」は道半ばである。

2-3. ダークツーリズムにおける市の取り組み

「鶉野飛行場跡地」は、旧姫路海軍航空隊の飛行士養成のための訓練基地として造られた。終戦後、国有地として残されてきた滑走路跡地は、2016 年 6 月に国から加西市に払い下げられ、市は、「鶉野飛行場跡地」周辺に残る防空壕、機銃座、滑走路などの歴史遺産群をフィールドミュージアムと見立て、周辺の散策用歩道整備や解説サイン等の設置とともに施設整備を行ってきた。また、フィールド周遊のための交流拠点として、歴史展示、観光案内、物販飲食等の機能を併せ持つ地域活性化拠点施設「sora かい」を建設中である。

この計画と並行して、市は市内の宿泊施設の誘致・整備に着手し、2018 年には 152 室のビジネスホテル「ルートイン加西 北条の宿」を市内中心街地に誘致・開業させた。また、市内の既存の宿泊施設である公共の宿「いこいの村はりま」の耐震・改修工事を行い、2018 年 4 月 1 日にリニューアルオープンするなど、今後増大させたい観光客に対応するための施設整備を進展させてきた。市は「鶉野飛行場跡地」の整備を誘客拡大の絶好の機会と捉え、前述した豊富な既存の地域資源との連携を進め、観光入込客と交流人口の増加を図っていこうとしているのである。

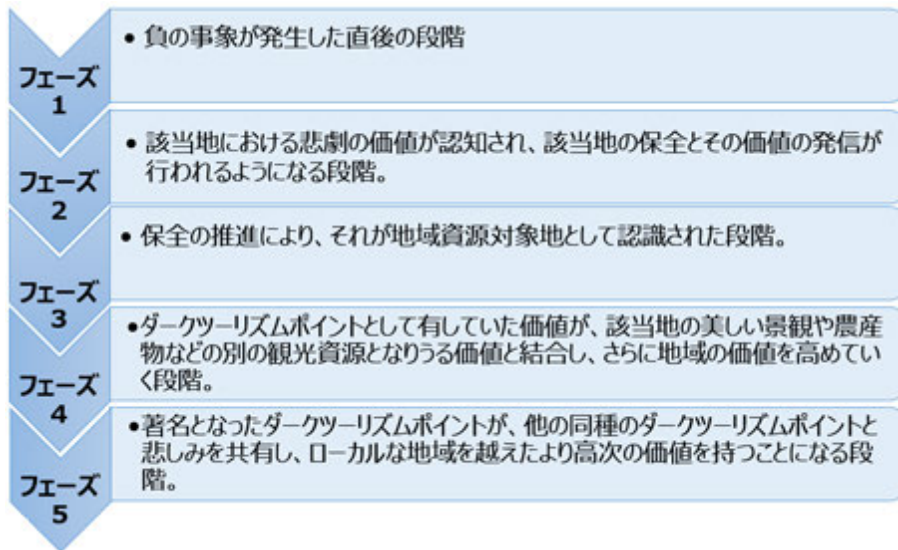
3. ダークツーリズムにおける地域イノベーションの発展過程について

井出 (2012) によると、ダークツーリズムという概念は、1990 年代にグラスゴーカレドニアン大学のジョン＝レノン教授とマルコム＝フォーリー教授によって提唱された概念である。彼らは、ダークツーリズムを、楽しみや喜び、余暇といったツーリズム本来が持つ価値概念とは全く違う、死や災害といった人間にとってつらい体験をあえて観光対象とする新しい観光のカテゴリーとして位置づけた。ダークツーリズムの対象地となる場所は、悲しみや悲劇の記憶を有した場所である。しかし、悲劇の場であるが故に、ダークツーリズムによって成立する地域イノベーションは、通常の観光まちづくりのそれとは違う「入口」と「発展過程」を経て成立する、という仮説が成り立つ。

井出 (2013) は、ダークツーリズムにおける地域イノベーションの発展過程を「フェ

ーズ1」から「フェーズ5」に至る5段階に分けて提唱している（図表2）。

図表2：ダークツーリズムにおける地域イノベーションの発展過程



出所：井出（2013, pp.4-5）を元に筆者作成

「フェーズ1」は、「負の事象が発生した直後の段階」である。この時期は、未だ悲劇の記憶が濃い時期であり、該当地を訪れる人々は、極めて個人的な事情で訪問する（井出、2013、p.4）。「フェーズ2」では、「該当地における悲劇の価値が認知され、該当地の保全とその価値の発信が行われるようになる段階」である。地域住民と訪問者両方に当該地域が持つ特別な価値が意識として共有され始め、その価値を後世に伝え継がなければならないものとして、対象遺産の保全と悲劇の伝承が行われ始める（井出、2013、p.4）。「フェーズ3」において、「保全の推進により、それが地域資源対象地として認識された段階」（井出、2013、p.5）となる。それは、まさに悲劇の場に地域資源としての新しい価値が与えられることを意味する。更に、次の「フェーズ4」を、「ダークツーリズムポイントとして有していた価値が、美しい景観や農産物などの別の観光資源となりうる価値と結合し、更に地域の価値を高めていく段階」（井出、2013、p.5）と位置づけている。別の観光資源と結合することで、お互いにその価値を高め合い、そのことが、その地域の総合的価値を高めることに繋がる。その地を訪れる観光客の滞在を長期化させたり、ダークツーリズム以外の観光形態を好む観光客が副次的にダークツーリズムを享受するというパターンも生じさせたりする。個々の地域資源が結びつ

き合い、互いに影響し合いながら相乗効果を生み出していく。この段階は、本研究の問題意識である「ダークツーリズムにおける観光クラスターの形成過程」に相当すると考えられる。

そして、最終段階となる「フェーズ 5」では、「著名となったダークツーリズムポイントが、他の同種のダークツーリズムポイントと悲しみを共有し、ローカルな地域を越えたより高次の価値を持つことになる段階」を迎える（井出、2013、p.5）。それは、対象遺産がダークツーリズム資源としての普遍的価値を持つことで、別の地域に存在する同種の遺産との結びつきを強め、単独では叶わない別次元の新たな価値を生み出していくことで、「フェーズ 4」とは違う新しい人の流れが生まれることを意味している。この段階をもって、「ダークツーリズムにおける観光クラスターの成立」と判断できる。

4. 先行事例の分析

本節では、前節の考察結果を踏まえ、戦争遺産を活用した観光まちづくりの先行事例である鹿児島県南九州市知覧地区（旧知覧町）の事例を分析し、その成功要因を明らかにする。

4-1. 南九州市知覧地区の概要

南九州市知覧地区は、鹿児島県南西部、薩摩半島の南部に位置し、南は東シナ海に臨む。1932年に知覧町となり、2007年に穎娃町、川辺町の2町と合併して南九州市となった（図表3）。現在は南九州市の中央部を占める。

旧町域は細長く、北東は鹿児島市、南西は枕崎市と接する。薩摩藩政時代、佐多氏の私領として麓集落が整備された。現存する美しい庭園（国名勝）をもつ武家屋敷群は、国の重要伝統的建造物群保存地区に選定されている。茶と畜産を中心とする農業が盛んで、特に茶栽培の歴史は古く、知覧茶として有名である。

太平洋戦争中は木佐貫原台地に陸軍の飛行場が建設され、特攻隊の基地となった。1955年に飛行場跡の一角に特攻平和観音堂が建立され、1985年には、当時の写真、特攻隊員の遺書などの遺品約4,500点、特攻隊員の遺影1,036柱などを展示する知覧特攻平和会館が観音堂に隣接して開設された。2004年には、老朽化した特攻平和観音堂の改築が行われ、あわせて、その周辺を「知覧平和公園」とする整備事業が進められ、現在では南九州市有数の観光スポットとなっている。

図表 3：南九州市知覧地区位置図



出所：鹿児島県ホームページと鹿児島県埋蔵文化センターウェブサイトを元に加工して筆者作成。

知覧町にあっては、1970年代から町の過疎化が進行し、また知覧茶に代表される主要産業であった茶業も嗜好の変化によって苦境に立たされていた状況にあった。そのため、地域活性の起爆剤として、知覧特攻平和会館を中心とする「知覧平和公園」周辺を、観光資源として開発・整備を進める必要があったのである。

このことは、「戦争歴史遺産を活かした観光まちづくり」を進める、本稿で研究の対象とする兵庫県加西市の事情と肉薄するところである。

4-2. 知覧地区の観光の現状

図表 4 は、南九州市の主要観光施設における観光客入込数について、コロナ禍によって観光客が激減した 2020 年以前の 2015 年度から 2019 年度の 5 年間の推移を表わしたものである。南九州市を訪れる観光客は、2015 年の 825,852 人をピークに減少傾向にはある。しかし、知覧地区にある「知覧特攻平和会館」と「知覧武家屋敷」の 2 つの施設の入込数が突出していることがわかる。

2019 年度における観光客全体数に対するこの 2 つの施設の構成比は、57.5%と 18.6%で、あわせて 76.1%となっている。南九州市を訪れる観光客の大半が知覧地区に集中しているのである。その中でも「知覧特攻平和会館」への入場者数が突出して多い。年間約 40 万人前後の人々が毎年、この戦争歴史遺産を目的に知覧地区を訪れているのである。次に観光客の入込数が多い「知覧武家屋敷」についてみると、2019 年度は 12 万人を割り込んではいるが、毎年、15 万人前後が訪れる観光資源として存在している。

図表 4 : 南九州市の主要観光施設における観光客入込数の推移

(単位:人)

	2015年度	2016年度	2017年度	2018年度	2019年度	
アグリランドえい	17,690	18,899	22,642	21,254	15,135	2.4%
畑の郷 水土利館	14,014	13,577	12,230	2,614	2,353	0.4%
知覧武家屋敷	163,924	125,457	144,085	162,496	118,006	18.6%
知覧特攻平和会館	476,746	359,427	381,647	407,819	364,414	57.5%
ミュージアム知覧	33,185	24,733	25,903	30,407	30,386	4.8%
民間施設(知覧地域)	19,508	13,105	15,775	14,152	12,043	1.9%
岩屋公園	100,200	103,800	96,700	126,000	87,500	13.8%
オートキャンプ 森のかわなべ	585	558	1,004	5,129	3,580	0.6%
合計	825,852	659,556	699,986	769,871	633,417	

出所：南九州市「統計南九州 令和2年度版」を元に筆者作成。

図表 5 は、旅行会社のクラブツーリズムが首都圏の顧客を対象に募集する『鹿児島 2泊 3日の旅』の販売コースをそのまま転載したものである。行程の 2 日目に知覧を訪れることになっているが、コースには明確に「(知覧) 武家屋敷」と「特攻平和会館」の両方がセットになって訪問地としてツアーに組み込まれていることがわかる。実は、クラブツーリズムのみならず、他の旅行会社大手が販売するツアー商品においても同様のコース取りをするのが業界では一般的となっている⁷。

図表 5 : 鹿児島 2泊 3日のツアーコース

日次	スケジュール
1日目	羽田空港(10:30発)->-鹿児島空港-車-【移動:約5分】霧島市内【名物黒麹豚御膳の昼食】-車-【移動:約45分】霧島神宮-車-【移動:約15分】霧島温泉郷・霧島ホテル[S](泊)
2日目	霧島温泉郷-車-【移動:約70分】仙巖園【見学後、鹿児島名物の「鶏飯」の昼食】-車-【移動:約70分】 知覧【武家屋敷と特攻平和会館にご案内】 -車-【移動:約50分】指宿温泉・指宿白水館[A](泊)
3日目	指宿温泉-車-【移動:約25分】池田湖【九州最大の湖】-車-【移動:約70分】維新ふるさと館-車-【移動:約15分】城山展望台【桜島を望む展望台】-車-【移動:約15分】鹿児島市内【老舗郷土料理店で昼食】-車-【移動:約40分】-鹿児島空港->-羽田空港(18:00着)

出所：旅行会社「クラブツーリズム」が販売する鹿児島 2泊 3日のコースを元に筆者作成。

それは、知覧地区では、この 2つの歴史遺産が互いに共存し、競争し合い、互いの訪

⁷ 筆者は長年、旅行会社に勤務しツアー造成を行ってきたが、知覧滞在時は必ず「知覧武家屋敷」と「特攻平和会館」の両方をコースに入れることが業界の常識となっていることを経験してきた。

問客を往来させることで相乗効果を生み出し、地域全体への誘客効果に結び付ける仕組みが出来上がっていることを示す事例といえる。

4-3. 知覧地区のダークツーリズムの発展過程

知覧地区のダークツーリズムの発展過程について、前節の考察結果に基づき分析すると、「フェーズ1」では、この地からの特攻機の出撃により、多くの若者が自ら命を絶った（戦死した）悲しい史実が存在することから、その過程が証される。「フェーズ2」では、この地における悲劇の価値が認知され、特攻平和観音堂が建立され、知覧特攻平和会館が開設されたことが挙げられる。「フェーズ3」では、この悲劇の価値を共有するために、全国各地から多くの訪問者がこの地を訪れる現象を受けて、旧知覧町が知覧特攻平和会館を中心とする「知覧平和公園」周辺を観光資源として開発・整備を進め、戦争歴史遺産を活かした観光まちづくりを推進したことが、この段階の成立を証している。

そして、「フェーズ4」の段階では、知覧特攻平和会館と知覧武家屋敷の2つの観光資源が、互いに影響し合いながら誘客という相乗効果を生み出し、更には、この地区に新たな観光事業者の登場をもたらした。現在、知覧地区には有料観光施設が5箇所、宿泊施設が10軒、観光客受入可能飲食店が15軒、土産物店が14軒、そしてタクシー事業者が2社、バス事業者が1社、がそれぞれ存在している⁸。

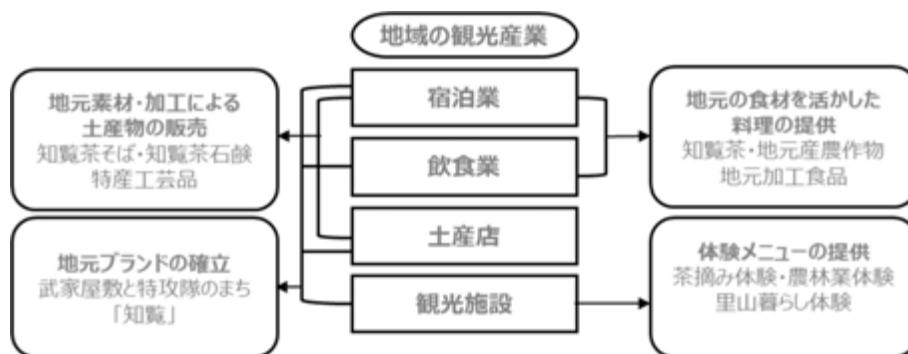
また、この段階において、知覧地区の特産品である“知覧茶”を活用した知覧茶そばや知覧茶石鹸などといった飲食、土産品の開発・販売を行う事業者、茶摘み体験や農林業体験、里山暮らし体験などといった、知覧地区に由来から存在する地域資源を活用した観光体験メニューを提供する事業者も現れるようになった。前述した井出(2013)が示した第4フェーズの事象である「ダークツーリズムポイントとして有していた価値が、美しい景観や農産物などの別の観光資源となりうる価値と結合し、更に地域の価値を高めていく段階」(井出、2013、p.5)がまさに実現している。

図表6は、知覧地区における「第4フェーズ」のビジネスモデルを表している。塩谷・川口(2004)によると、観光客の「消費単価」と観光産業の「域内調達率」を高めるために有効と考えられる施策の方向性としては、(1)地元食材を活かした料理の提供、(2)地元素材・加工による土産物の販売、(3)地域ブランドの確立、(4)体験メ

⁸ 有料観光施設については「知覧町内観光施設詳細情報」(2020年5月現在版)を参考に、宿泊施設・タクシー事業者・バス事業者については「知覧町観光マップ」(2020年2月1日現在版)を参考に、観光客受入可能飲食店については「南九州市GoToEatキャンペーンプレミアム付食事登録店一覧表」(2020年12月23日更新版)を参考に、土産物店については「南九州市GoTo地域共通クーポン登録店一覧」(2020年12月23日発行)を参考に、それぞれ算出をおこなった。

ニューの提供の4点を挙げている（塩谷・川口、2004、pp.28-29）。知覧地区の第4フェーズ段階では、これら（1）～（4）が成立している状態にある。知覧地区においてダークツーリズムが地元経済に対して、観光産業の進展と経済波及効果をもたらすまでに発展している。この段階を、知覧地区の「ダークツーリズムにおける観光クラスターの形成過程」と位置づけられる。

図表6：知覧地区における施策に関連する観光産業と経済効果の波及先



出所： 塩谷・川口（2004, p. 29）を参考に筆者作成。

最終段階である「フェーズ5」では、知覧特攻平和会館が、他の同種のダークツーリズムポイントと連携し、地域を越えたより高次の価値を持っていることが確認できる。それを象徴する事象として、同会館が、国内では、同じ鹿児島県南さつま市にある「万世特攻平和祈念館」、福岡県筑前町の「大刀洗平和記念館」と3館連携協定を結んでいること⁹、海外では、米国ハワイ州のパールハーバーに保存・公開されている「戦艦ミズーリ記念館」、そして、米国ニューヨーク州のハドソン川に保存・展示されている「空母イントレピッド海上航空宇宙博物館」と提携¹⁰していることである。加えて、知覧特攻平和会館では、特に修学旅行や校外学習を目的に同館を訪れる鹿児島県内外の小中学生を対象に独自の平和学習プログラムを提供している。この段階に至れば、知覧地区の「ダークツーリズムにおける観光クラスターの成立」と位置づけられる。

4-4. ダークツーリズムを支える地域住民の役割

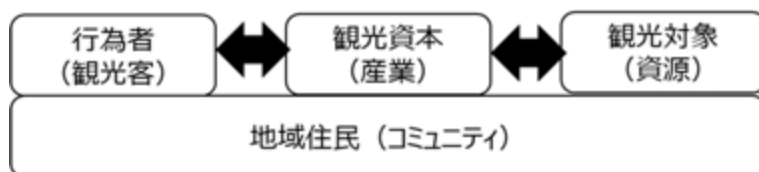
⁹ この連携は、かつて陸軍特攻基地が置かれた地として共通する3館が、資料保存の情報共有を図るなど、戦争の記憶の継承や平和な社会構築へ向けて連携して取り組んでいくことを目的としている。

¹⁰ 1945（昭和20）年4月11日、沖縄戦に参加していた「戦艦ミズーリ」は、鹿児島県の喜界島沖にて特攻攻撃を受けた。この時、甲板に投げ出された特攻隊員の遺体を、ミズーリの艦長は正式な水葬の儀式で葬ることを提案し、翌日、特攻隊員の遺体は米軍兵士たちによる手作りの旭日旗に包まれ、手厚く弔われた。また、「空母イントレピッド」は、太平洋戦争中に4回の特攻攻撃を受け、計88名の米軍兵士が亡くなった。沖縄戦では、1945（昭和20）年4月16日には沖縄近海で特攻攻撃を受けている。「戦艦ミズーリ記念館」とは姉妹館提携を締結している。

旧知覧町では、「古い町並みに心やすらぐ町」「平和の尊さを語りつぐ町」を基本コンセプトに、行政と地域住民が一体となって、知覧武家屋敷を中心とする古い町並みの保存、そして、ダークツーリズムの成立過程に深く関わる平和情報の発信基地としての役割の推進が行われてきたといわれている。有馬・陳・橋口・深見（2004）による住民へのインタビュー調査によると、知覧に特攻基地があったことを風化させてはならないという強い思いをほとんどの住民がもっている。深見（2009）は、「現に、戦時中、知覧のほかにも各地に特攻基地が造られていたが、特攻基地といえば知覧を連想するまでになった今日の知名度は、地域住民（コミュニティ）の結束した成果であろう。」（深見、2009、p.46）と述べている。このことは、知覧地区がダークツーリズムポイントとして発展できた最大の要因が、地域の歴史を「よりどころ」とする地域住民の主体的な活動によって支えられてきたことによるものであることを表しているといえる。

図表7は、深見（2009）が示した歴史遺産を活かした観光地経営の、持続可能性・将来性に繋がる観光の構成要素を表したものである。深見（2009）は、「すでに地元の歴史について知っている住民と歴史観光とは、元来深く結びつきやすいともいえる。地元で観光対象（資源）があり、生活に身近であるという認識が定着すれば、観光地に対する愛着や誇りといった「よりどころ」が住民におのずと生まれてくる。すなわち、住民が「演出役」を担い、みずから観光対象（資源）のブラッシュアップに参画していくのである。」（深見、2009、p.46）と述べている。このことから、歴史遺産を活かした観光地経営が地域住民という基盤の上に成り立ち、地域住民の主体的な関わりのなかで発展していくことが読み取れるのである。

図表7：持続可能性・将来性に繋がる観光の構成要素



出所：深見（2009、p.47）を参考に筆者作成。

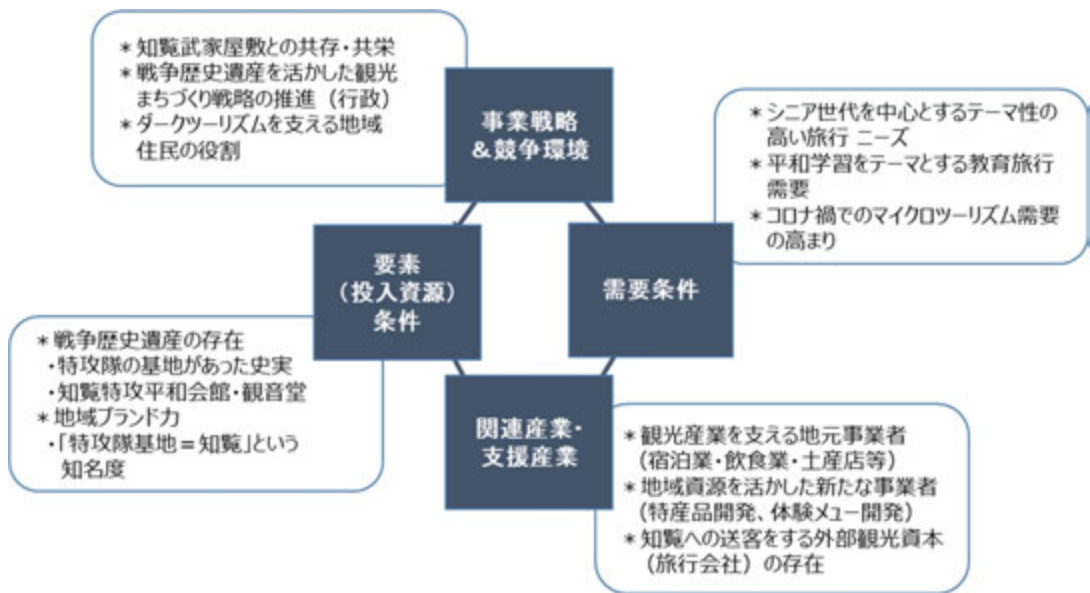
4-5. 「ダイヤモンド・モデル」による検証

以上の分析から、先行事例として取り上げた知覧地区のダークツーリズムにおける観光クラスター形成の成立要件を、「ダイヤモンド・モデル」を用いて検証してみると、図表8のようになる。この図から、クラスターの成立可能性を図る4つの条件である

「要素（投入資源）条件」「事業戦略および競争環境条件」「需要条件」「関連産業・支援産業条件」のいずれについても、既に一定の条件を満たしていることがわかる。

それは、地元の様々な地域経営主体（宿泊業、飲食業、土産物店、地域加工事業者、農林事業者等）が、ダークツーリズムポイントである「知覧特攻平和会館」をその中核と位置づけ、そこから、知覧武家屋敷や知覧茶や、その他の知覧固有地域資源との結びつきを通じて、それらが時には協働し、時には競い合いながら相乗効果を生み出すことにより、地域が主体となって地域経済を活性化させていく体制が存在することを示している。「観光クラスター」の成立によって地域内観光（面展開による地域内回遊・周遊型観光の仕組み）が実現していることがわかる。

図表 8：知覧地区のダイヤモンド・モデル



出所：筆者作成。

5. 加西市の課題

前節では、先行事例として取り上げた鹿児島県南九州市知覧地区（旧知覧町）において、ダークツーリズムの発展過程と、ダークツーリズムポイントを中核とする観光クラスターの成立要件を分析した。本節では、その分析手法をそのまま本稿の考察対象である兵庫県加西市にあてはめることで、加西市の課題を明らかにする。

5-1. 加西市のダークツーリズムの発展過程

前述の通り、加西市では、国有地として残されてきた「鶉野飛行場跡地」を2016年に国から払い下げられたのを契機として、周辺に残る防空壕、機銃座、滑走路などの歴史遺産群をフィールドミュージアムと見立て、周辺の散策用歩道整備や解説サイン等の設置とともに施設整備を行ってきた。あわせて、図表9の通り、情報発信ツールとして、「鶉野飛行場跡地」を広く知ってもらうための専用のリーフレットを作成してきた。また、フィールド周遊のための交流拠点として、歴史展示、観光案内、物販飲食等の機能を併せ持つ地域活性化拠点施設「sora かさい」を現在、建設中である。既に、特攻隊員達が残した遺書を映像にて公開する「巨大防空壕シアター」や、特攻攻撃に使われた戦闘機「紫電改」の実物大模型は一般公開されている。

図表9：加西・鶉野飛行場跡 ガイドブックの表紙



出所：加西市教育委員会（左は一般向け、右は小中学生向け）を元に筆者作成。

一方で、1999年10月には、特攻兵士の慰霊と地域の平和と安寧を願うことを目的に、当該地に地元の関係者、旧軍関係者、有志等により、「鶉野平和祈念の碑」が建立された。また、慰霊碑の建立と合わせ、1998年には、「白鷺隊」特攻戦没者等の慰霊顕彰、鶉野飛行場に関する調査研究、鶉野飛行場に関する記録の保存と継承、「加西市鶉

野ミュージアム」整備発展への支援、を目的とする地元住民主導の官民連携団体である「鶉野平和祈念の碑苑保存会」（2016年に一般社団法人化）が設立された。

これらのことから、加西市のダークツーリズムの発展過程が、負の事象が発生した直後の段階である「フェーズ1」と、該当地における悲劇の価値が認知され、該当地の保全とその価値の発信が行われるようになる段階である「フェーズ2」を既に経ていることがわかる。

同様に、保全の推進により、それが地域資源対象地として認識された段階である「フェーズ3」についても既に達していると考えられる。「鶉野平和祈念の碑苑保存会」は、『加西市鶉野を平和学習のまちに！』をスローガンに、飛行場跡を戦争遺跡に再生させることで、史実を記録・保存しながら戦争の記憶を次世代に伝え残す活動に取り組んできた¹¹。その活動は、市の「加西市鶉野ミュージアム構想」と連携し、現在も官民共同の取り組みとして進められており、保存会によると、コロナ禍にも関わらず、令和2年度は近畿地方を中心に小・中学校あわせて40校が平和学習を目的に「鶉野飛行場跡」を訪れた¹²、ということであった。

それでは、「ダークツーリズムポイントとして有していた価値が、美しい景観や農産物などの別の観光資源となりうる価値と結合し、更に地域の価値を高めていく段階」（井出、2013、p.5）といわれる「フェーズ4」段階についてはどうか。

図表10は、加西市における観光客の目的別入込数¹³を、市が国から「鶉野飛行場跡地」の払い下げを受け、その整備事業を始めた2016年からコロナ禍の影響前の2019年までの4年間についてまとめたものである。この表から、次のことが読み取れる。

加西市の観光客の総入込客数は、コロナ禍前まで90万人前後で推移しているが、その大半が、「歴史・文化・観光見学施設」への訪問者と、「スポーツ・レクリエーション」を目的とする訪問者である。うち、最も訪問者が多い「スポーツ・レクリエーション」については、加西市にあるゴルフ場6ヶ所と市が管理運営する運動公園、体育館等、

¹¹ 鶉野飛行場に関する調査研究、記録の保存と継承、「加西市鶉野ミュージアム」整備発展への支援のほか、市内外での展示会・講演会の開催や鶉野飛行場ガイドの養成（鶉野飛行場ガイド養成講座を開講し、修了者を「鶉野飛行場認定ガイド」として認定している。）そして、「平和学習」の一環として、地元や周辺地域の小・中学校の授業での鶉野飛行場の紹介を行っている。あわせて、図表10の通り、加西市教育委員会が発行する小・中学生向けの鶉野飛行場学習用ガイドブックの編集を行ったり、現地での学校向け「平和学習プログラム」の提供を行ったりしている。

¹² 兵庫県県民生活課企画ネット情報誌「すごいすと」（<https://sugoi.st.pref.hyogo.lg.jp/interview/uetaniakio>）の記事より引用

¹³ 目的別区分については、次のように定義する。自然：自然景観が鑑賞できる観光地点、エコツーリズム、グリーンツーリズムなど。歴史・文化・観光見学施設：寺社・仏閣といった歴史的建造物及び博物館・美術館、水族館といった見学施設、産業ツーリズムなど。温泉・健康：温泉法に基づく温泉地、ヘルスツーリズムの観光形態など。スポーツ・レクリエーション：スポーツやレクリエーションを主目的に計画・整備された施設。行事：地域住民の生活において伝統と慣行により継承されてきた、恒例として日を定め執り行う歴史的催し・祭り、郷土芸能等。イベント：常設若しくは特設の会場施設において行われる博覧会、見本市、コンベンション等。

それらの利用者の総数¹⁴である。ここでは、次に訪問者が多い「歴史・文化・観光見学施設」について分析する。

図表 10：加西市における形態別・目的別観光客入込数（2016年～2019年）

(単位：千人)

		2016	2017	2018	2019
総入込客数		871	837	921	939
目的別	自然（エコ・グリーンツーリズム）	17	15	17	16
	歴史・文化・観光見学施設	311	320	338	383
	温泉・健康	0	0	0	0
	スポーツ・レクリエーション	464	434	501	493
	行事・イベント	79	68	65	47

出所：兵庫県産業労働部観光振興課「兵庫県観光客動態調査報告書」（平成 28.29.30 年度版、令和元年度版）を元に筆者作成。

市内の主要観光資源でこの分野に分類されるものとしては、「西国街道北条の宿」と「法華山一乗寺」「玉丘史跡公園（玉丘古墳群）」、「五百羅漢」などが代表的なものとして挙げられる。そのうち、「法華山一乗寺」は、西国第二十六番札所として有名な古刹で、境内には国宝である国内屈指の古塔である三重塔が現存し、境内は、春は桜、秋は紅葉の名所としても知られ、1年を通じて7万人から多い年で9万人前後の観光客が訪れる北播磨エリアを代表する観光名所の1つである。また、加西市には観光見学施設として「兵庫県立フラワーセンター」がある。これは、約46haの広大な敷地内に、四季折々の約4,500種類もの草花が1年を通じて鑑賞できる全国でも有数の花と緑の植物園として知られ、2016年度は年間約22万6,000人が入園している。そして、園内に古代鏡展示館（兵庫県立考古博物館加西分館）が開館した2017年以降は、更に入園者が増加し、2019年度の年間入園者数は約28万人となっている。このことから、図表10にある「歴史・文化・観光見学施設」を目的とする訪問者のほとんどが「法華山一乗寺」と「兵庫県フラワーセンター」の入場者であることがわかる。

そして、市が国から払い下げを受け、観光資源化するために整備を続けている「鶴野飛行場跡地」については、ダークツーリズムポイントとして認知され、前述の通り、平和学習を目的とする学校団体を主とした限定的な層の訪問は実現しているものの、加西市の観光客入込数増加の起爆剤には未だなっていないこと、そして、他の地域資源

¹⁴ 加西市ふるさと創造部文化・観光・スポーツ課からの情報提供による

に対して相乗効果を生み出す存在にもなっていない状況であることがわかる。

他方、観光関連消費という視点から、加西市の商工事業者の現状を考察し、加西市を訪れる年間90万人前後の入込客が、地元経済に好循環をもたらしているかを検証する。

図表11は加西市の商工事業者数を2009年度と2016年度で比較した表である。この表から、2016年度は商工業者が1,758社あり、そのうち小規模事業者数は1,606社で77.4%を占めている。2009年度と比較すると商工業者数全体では281社の減少となっているが、そのうち87%にあたる245社が小規模事業者数であり、廃業する事業者のほとんどを占めており、小規模事業者を取り巻く厳しい状況がうかがえる。事業所数減少の原因としては、経営者の高齢化と後継者不足、そして、2008年に開業した大手量販店（イオングループ）の影響によるといわれている。大手量販店の進出に対抗した地域密着や地産地消・外消への変革が遅れ、今も廃業する事業者が年々増加傾向にあることが挙げられている¹⁵。

図表 11：加西市の商工事業者数（2009年度と2016年度の比較）

	商工業者数	小規模事業者数	小規模事業者数の割合
2009年度	2,039社	1,606社	78.80%
2016年度	1,758社	1,361社	77.40%
減少数	▲281社	▲245社	87.20%

出所：加西商工会議所経営発達支援計画（2020年3月16日付.経済産業省により認定）を元に筆者作成。

したがって、観光産業においては、加西市には「兵庫県立フラワーセンター」「法華山一乗寺」、そして戦争遺産である「鶉野飛行場跡地」など、観光入込客・観光関連消費額に貢献する、また、将来その可能性のある施設が存在するにもかかわらず、それら観光客の飲食や商品購入等の2次消費の取り込み機会を逸しているのが現状であろう。そのため、観光の地域経済への波及効果がもたらされているとは言い難く、今後、継続的な入込客数・売上高を確保し、交流人口の増加による地域の小規模事業者への波及効果を創出するための新たな事業をどのように展開するかが課題となる。

以上より、加西市を訪れる観光客の訪問目的と動向、そして、観光客がもたらす経済波及効果の視点から加西市の現状を鑑みると、井出（2013）のいうダークツーリズムの発展過程としては、未だ「フェーズ3」の段階であり、「フェーズ4」そして、その先の

¹⁵ 加西商工会議所経営発達支援計画（2020年3月16日付.経済産業省により認定）p.4より引用。

「フェーズ5」には至っていないと判断できる。

5-2. ダークツーリズムと加西市民

加西市における、戦争遺産「鵜野飛行場跡地」に対しての加西市民の意識や活動についてはどのように評価できるか。2020年、加西市は、市外に住む1,000名を対象にインターネットによるウェブ定量調査「加西市および周辺エリア観光ニーズ調査」¹⁶を実施している。

図表12は、その調査の結果として加西市の認知度と旅行（訪問）経験の現状を示したものである。結果、加西市が兵庫県播磨エリア10市町村中7番目と、その知名度が低いことがわかる。また、旅行（訪問）経験についても兵庫県内在住者でも2割と、近隣からの集客もまだまだ途上段階にあることがわかる。

図表12：加西市の現状（認知度と旅行（訪問）経験に関する調査



出所：「加西市および周辺エリア観光ニーズ調査（2020.楽天インサイト(株)）より転載

図表13は、「加西市の主要地域資源での体験プログラムに対するの魅力度調査」の結果を示している。市内のダークツーリズムポイントに関しては、①「鵜野飛行場跡展示の紫電改、操縦席試乗体験」、②「鵜野飛行場跡ほか戦争史跡を廻るガイドツアー」、

¹⁶ 加西市の委託を受けて楽天インサイト(株)が、近畿圏ならびに首都圏に在住する20歳から69歳までの男女1,000名（住居・性別・年代別に均等に各50名ずつ配分）を対象におこなったウェブ定量調査。

③「青野原俘虜収容所跡地、ガイド付き散策」の3つの体験コンテンツが記載されている。

図表 13：市内の主要地域資源での体験プログラムに対する魅力度調査

(%)	n	非常に魅力的だ	やや魅力的だ	どちらともいえない	あまり魅力的ではない	まったく魅力的ではない	魅力	非魅力	
	(1,000)	19.3	31.6		27.2	13.0	8.9	50.9	49.1
気球のまち、加西から見る空からの権威エリア体験	(1,000)	10.6	36.2		31.6	13.2	8.4	46.8	53.2
加西の特産品を使用したB級グルメ体験	(1,000)	10.6	32.8		30.8	14.7	11.1	43.4	56.6
加西の酒蔵見学	(1,000)	8.0	34.9		32.9	15.5	8.7	42.9	57.1
加西の醤油蔵見学	(1,000)	6.6	34.8		35.3	13.9	9.4	41.4	58.6
北条町、歴史的町並みの散策	(1,000)	8.6	30.3		33.6	17.0	10.5	38.9	61.1
北条鉄道、貸し切りツアー	(1,000)	6.7	26.9		37.4	16.9	12.1	33.6	66.4
伝統技法「大和縮み」で作られた築120年超の古民家、宿泊体験	(1,000)	5.4	27.4		31.5	21.7	14.0	32.8	67.2
兵庫県立アワーセンターでの「花料理」体験	(1,000)	7.0	25.5		35.4	19.0	13.1	32.5	67.5
加西トマト収穫体験	(1,000)	6.2	25.9		35.6	20.8	11.5	32.1	67.9
加西の農産物収穫体験	(1,000)	7.7	23.9		34.1	21.8	12.5	31.6	68.4
猪野飛行場跡展示の音響改、操縦席試乗体験	(1,000)	7.0	23.3		34.0	22.5	13.2	30.3	69.7
北条鉄道、整備工場見学	(1,000)	5.2	22.4		36.5	22.8	13.1	27.6	72.4
猪野飛行場跡ほか戦争歴史を巡るガイドツアー	(1,000)	3.9	22.0		40.2	22.2	11.7	25.9	74.1
加西市内にある「権威国風土記」ゆかりの地ハイキング	(1,000)	4.0	17.5		38.0	24.0	16.5	21.5	78.5
青野原俘虜収容所跡地、ガイド付き散策	(1,000)	3.0	17.3		35.5	26.4	17.3	20.8	79.2
加西のお寺での写経・写仏体験	(1,000)								

※魅力的計で除く
2%以下は表記を省略

出所：「加西市および周辺エリア観光ニーズ調査（2020.楽天インサイト(株)」より転載。

調査の結果、「非常に魅力的」あるいは「やや魅力的だ」と回答したのが、①については全体の31.6%、②については31.6%、③については21.5%（「あまり魅力的ではない」「まったく魅力的ではない」という回答が①については68.4%、②については72.4%、③については78.5%）となる。

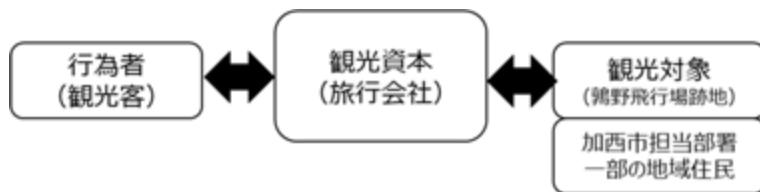
すなわち、加西市の戦争歴史遺産に対する魅力度に関しては、魅力的と感じる回答割合が30%前後と低く、逆に非魅力的とする回答の割合が70%強と非常に高いことがわかる。先行事例として紹介した知覧地区と同じ特攻基地というテーマを持ちながら、しかも、全国の特攻基地遺跡で、唯一、滑走路とそれに付随する防空壕等が当時のまま現存し公開されているという、他の地域とは異なる独自の優位性を有しているにも関わらず、なぜ、このような結果が出たのかが大変興味深い。

その要因として、やはり、図表 12 の調査結果の通り、加西市、そして、戦争遺跡で

ある「鶉野飛行場跡地」の知名度の低さが大きく影響していると考えられる。そこには、加西市ならではの特殊な事情が影響している。加西市が、この戦争遺跡を市の主要な観光資源として取り上げ、本格的に整備を開始したのは、既に前述した通り、国から土地・施設の払い下げを受けた2016年以降である。したがって、対外的広報活動や認知度向上活動が始まったのもまだ日が浅く、未だ広く一般にその存在が認知されていないのは仕方のないところである。

それでは、終戦から払い下げを受けるまでの約70年間はどのような事情であったのだろうか。終戦後、「鶉野飛行場跡地」一帯は、民間所有地や神戸大学の農場となり、滑走路は一時期、陸上自衛隊の訓練地として使用された時代もあったが、時の流れとともに特攻隊の基地であった記憶は、地元でも次第に薄れていったといわれている。2010年に加西市教育委員会と神戸大が合同で行った初の学術調査に参加した同大の佐々木和子研究員は、「いずれ開発されて消える。せめて記録保存しておこうとの方針だった」と、当時の事情を説明している¹⁷。つまり、「鶉野飛行場跡地」は、いずれ無くなる場所として市民に認知され、戦後の長い年月の経過とともに、やがて、地元でも忘れられた存在になっていったのである。このことが強く影響し、現段階では、加西市に特攻基地があったことを風化させてはならないという強い思いや、この施設を市民が主体となって保全していこうという意識が、一部の市民の取り組みによって浸透しつつあるものの¹⁸、地元市民全体に共有された状態にはまだなっていないのが現状である。

図表 14：加西市のダークツーリズムに係る構成要素（現状）



出所：深見（2009, p. 47）を参考に筆者作成。

その状態を表すものが図表 14 である。観光対象（資源）である「鶉野飛行場跡地」には、平和学習を目的とする学校団体を主とした限定的な層の訪問は実現しているが、それは、それに関わる加西市の担当部署と一部の地元住民によって支えられてはいる

¹⁷ 日本経済新聞ウェブ版.2020年8月13日号 (<https://www.nikkei.com/article/DGXMZO62559190S0A810C2960E00/>) より引用。

¹⁸ 加西市は、市民らを集めて「鶉野飛行場跡地」の活用法を話し合うワークショップを開催し、また、跡地の管理と整備・活用を担当する専門部署を設置した。市民の有志で組織する「鶉野平和祈念の碑苑保存会」は、その活動を通じて、市民の意識醸成に努めている。

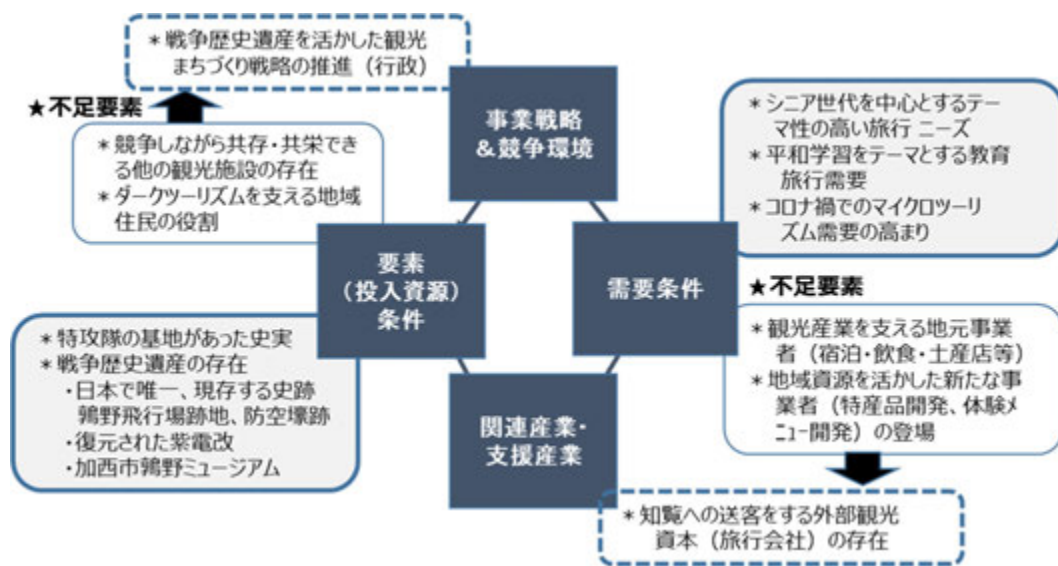
ものの、誘客の主導権（主体）は観光資本である旅行会社が持ち、地元は受け入れ先としての役割のみを担う状況で止まっている状態である。すなわち、ダークツーリズムが地域住民という基盤の上に成り立ち、地域住民の主体的な関わりのなかで発展していく過程には未だ至っていないのである。

5-3. 加西市ダークツーリズムの「ダイヤモンド・モデル」による検証

これまでの分析により、加西市のダークツーリズムにおける発展過程は「フェーズ3」の段階であり、未だ「観光クラスターの形成過程」に至っていないことがわかった。

加西市において、「観光クラスター」を形成するために必要なものを明らかにするため、「ダイヤモンド・モデル」を用いて検証してみると、図表 15 のようになる。

図表 15：加西市のダークツーリズムのダイヤモンド・モデル



出所：筆者作成。

この図から、クラスターの成立可能性条件である4つの条件のうち、「要素（投入資源）条件」「需要条件」については、既に一定の条件を満たしていることがわかる。しかし、「事業戦略および競争環境条件」「関連産業・支援産業条件」については、不足要素が存在していることがわかる。具体的には、「事業戦略および競争環境条件」においては、市内の他の観光施設や地域資源との共存・共栄・競争関係構築による相乗効果もたらされていないこと。そして、ダークツーリズムを支える地元住民の主体的役割

の醸成が道半ばであることが挙げられる。「関連産業・支援産業条件」については、観光産業を支える地元事業者（交通手段、宿泊・飲食等の観光関連事業者）の出現、地域資源を活かした新たな事業者（特産品開発、体験メニュー開発、ダークツーリズム関連グッズ等の開発）の登場が無いことが指摘できる。

5-4. 加西市の課題

以上の分析から、「フェーズ3」の途上にある加西市の課題は、「地域住民の主体的役割」「競争・共存・共栄する他の観光施設の存在」「観光産業を支える地元事業者の存在」そして「新たな事業者の登場」の4つの要因の不足にあると考えられる。

「フェーズ3」を経て、「フェーズ4」から「フェーズ5」へダークツーリズムを発展・成立させ、本稿の目的である点から面展開への移行による「地域内観光（地域内回遊・周遊型観光）」の実現を図るためには、この4つの不足（課題）をどう解決するのかが鍵となる。そして、その解決方法を検討することは、同時に、それが加西市における観光クラスター形成のための戦略として位置づけられる。

6. 加西市における観光クラスター形成戦略

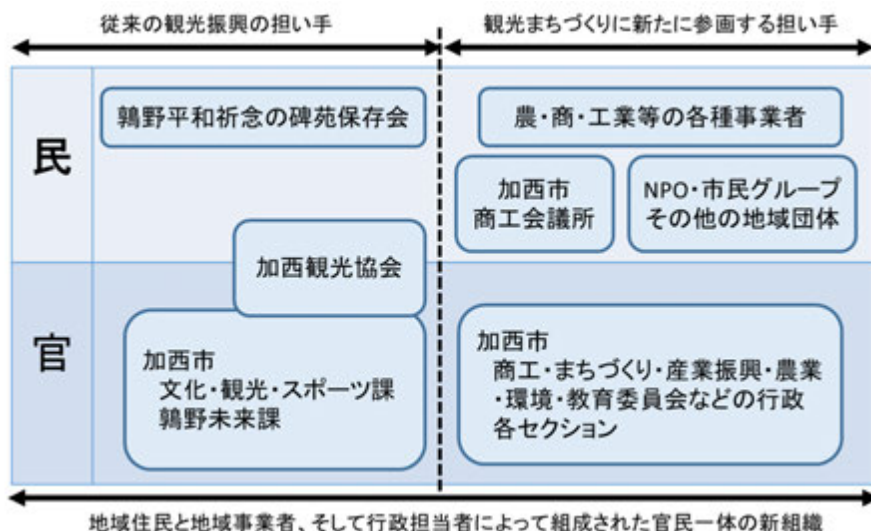
6-1. 官民一体による「観光推進プラットフォーム」の形成

ダークツーリズムポイントは、負の事象が発生した悲しみの場所でもあり、この場所を、観光客が集う観光地とすることに対する地元住民の反発、反対が起こり得ることも当然のことといえる。その地や施設を、そして、その史実を風化させてはならない、伝えていき、保全していかなければならないという意識が共有され、その手段の一つとして観光を選択することに、地域住民が納得、共感したときにはじめて、ダークツーリズムの成立過程が始まるのである。

そのことから、加西市では、今後、「戦争歴史遺産を活かした観光まちづくり」を進めていくうえでは、地域住民が行政（加西市）と一緒に主体・主役となって推進していく新たな体制の構築が必要である。そして、そのために必要なことは、従来の観光振興の担い手のみならず、幅広く市民を代表するNPO組織や市民グループ、更には、これまで観光の担い手とされていなかった農・商・工業等の各種事業者、商工会、そして、行政側からは、従来の縦割り行政を打破した、観光行政セクションのみならず、商工・まちづくり・産業振興・農業・環境・教育委員会といった各セクションの横断的参画が求められるのである。

高橋（2017）は、「これまでの、従来型観光事業者だけでの取組みの壁を破り、地域で新たな担い手を作り上げ、関係者の合意を拡げていくことが必要となる」（高橋、2017、p.147）と述べている。加西市に当てはめると、幅広い地域住民と地域事業者、そして行政担当者によって組成された新組織こそが、ダークツーリズムを支える地元住民の主体的役割の醸成を図るための基盤（プラットフォーム）として必要となる（図表 16）。

図表 16：観光まちづくりに新たに参画する担い手



出所：高橋（2017、p. 147）を参考に加筆修正し筆者作成。

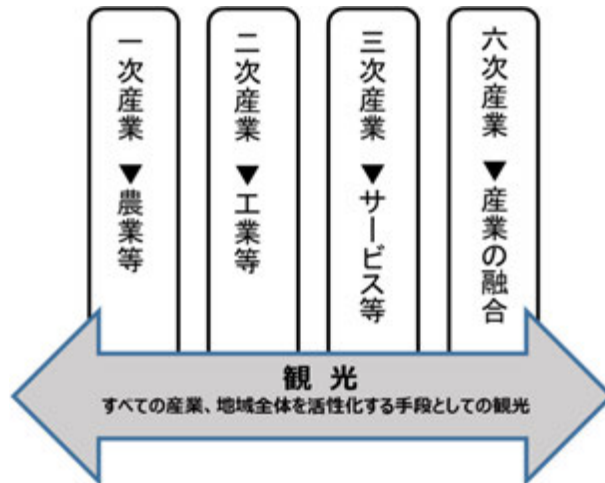
6-2. 多様なプレーヤーを巻き込むことの重要性

新組織を維持・発展していくためには、市内の多種多様な産業の関係者を巻き込みながら進めていくことが重要となる（図表 16）。大澤（2017）は、「観光」は、「目的」ではなく、その地元にはかない、地元ならではの地域資源を引き立たせる「手段」であるべきだ、と主張する。

図表 17 は、その考え方に立った、地域産業全体における「観光」の立ち位置を示すものである。地域資源とは、その地域に根付く地域特有のものをいう。自然環境や地形、生活様式、地場産業、農林水産業、食習慣、伝統芸能、特産品、町並み、そこに暮らす人々の生活・風習などがそれにあたる。そして、それらは「観光」という「手段」によって、その地域が誇る地域の価値となりうる可能性を秘めているのである。これらの地域資源を、地域経済を支えるコンテンツとして活用していくことこそが、地域

資源を活かした観光まちづくりの方向性となるのである。

図表 17：地域経済を支える「手段」としての観光



出所：大澤（2017）講演会資料を参考に加筆修正し、筆者作成。

そのためには、図表 16 で示した通り、新組織に各産業ごとの多種多様な関係者に参画してもらうことで、参画者それぞれに「観光振興と自身の産業をどう結び付けていくことができるか」、「観光振興のなかで自身の事業に新しいビジネスチャンスが見いだせないか、」を、一緒に検討してもらう場をつくっていくことが重要である。その場は、5 節で示した加西市の 4 つの課題のうち、「競争・共存・共栄する他の観光施設の存在」「観光産業を支える地元事業者の存在」そして「新たな事業者の登場」の 3 つの課題への解決策に結びついていく入口の役割を担うものである。

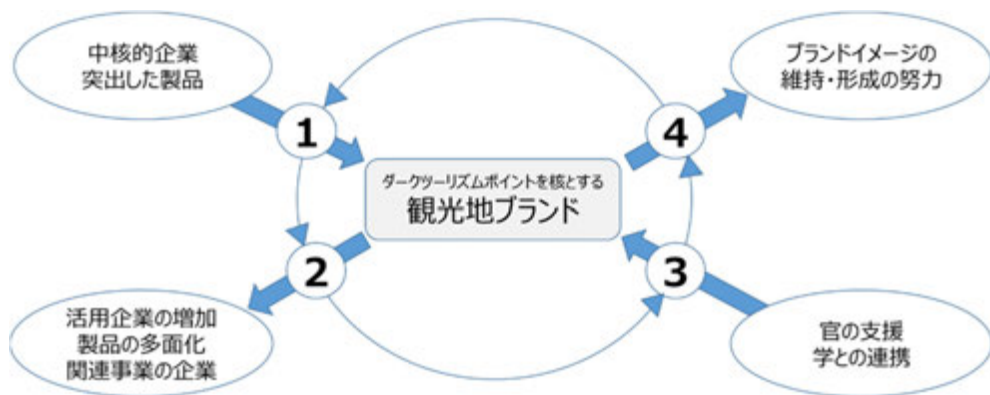
多種多様な関係者によって組成された新組織では、組織の拡充・活性化のために、以下のことを検討していく必要がある。1 つは、ダークツーリズムポイントである「鶴野飛行場跡地」の存在が、地域に与えるプラスの影響である。「地域の価値の再発見」「地域のアイデンティティの確立と共有」「地域を学ぶ生涯学習の効果」「地域の魅力を保存、継承する効果」などがそれに該当すると考えられる。もう 1 つは、ダークツーリズムポイントの観光資源としての経済効果についてである。「他の産業（農業、工業、販売業）を振興する効果」「雇用を生み出す効果」「起業家を生み出す効果」などがそれに該当する。これらの機会創出、気づきは、地域を牽引する新しい地域リーダーの育成にも繋がっていくのである。

6-3.地域ブランドの創出

十代田・山田・内田・伊良皆・太田・丹治（2010）は、「地域ブランドとは、地域資源の価値が地域内の生活者、関連組織に共有され、それが地域外に発信され、定着することによって構築されるもの」（十代田他、2010、p.78）と定義している。更に十代田他（2010）は、観光地ブランドの形成プロセスを以下のように解説している（十代田他、2010、p.93）。

- ①マイクロ側の主体の努力によって、地域の特性を活かした観光地ブランド化の突破口となる中核的企業ブランドや突出した製品ブランドが生まれる。
- ②観光地ブランドの黎明を感じとった周辺企業が、その観光地ブランドを活用して、ほかの農産品・地場産品ブランド関連製品・事業を立ち上げるようになる。
- ③観光地ブランドとその関連産業の盛り上がりを見て、官や学が支援や連携を地域企業との間で行うようになる。
- ④地域イメージの維持・形成の努力が、引き続きマクロおよびマイクロの主体によって実践されるようになり、それが革新的な地域ブランドの基礎として作用する。

図表 18：観光地ブランドの形成・展開プロセスのモデル



出所：十代田他（2010、p.93）を参考に、加筆修正し筆者作成。

図表 18 は、観光地ブランドの形成・展開プロセスを、加西市にあてはめてモデル化したものである。図表の通り、①②③④段階の形成プロセスを経て、ダークツーリズムポイントである「鶉野飛行場跡地」を核とする加西市独自の観光地ブランドが形成され、それが、地域経済の活性化に繋がる新たな付加価値（イノベーション）創出の源泉

となり、そして、そのことが、前節において不足要素の存在を指摘した「事業戦略および競争環境条件」「関連産業・支援産業条件」の具体的な解決策として機能する、と考えられるのである。

6-4. 加西市の観光クラスター形成の戦略マップ

官民一体の新組織による「観光推進プラットフォーム」の運営においては、参加メンバー間の目的や方向性の共通認識・共有化・ベクトル合わせが極めて重要となる。

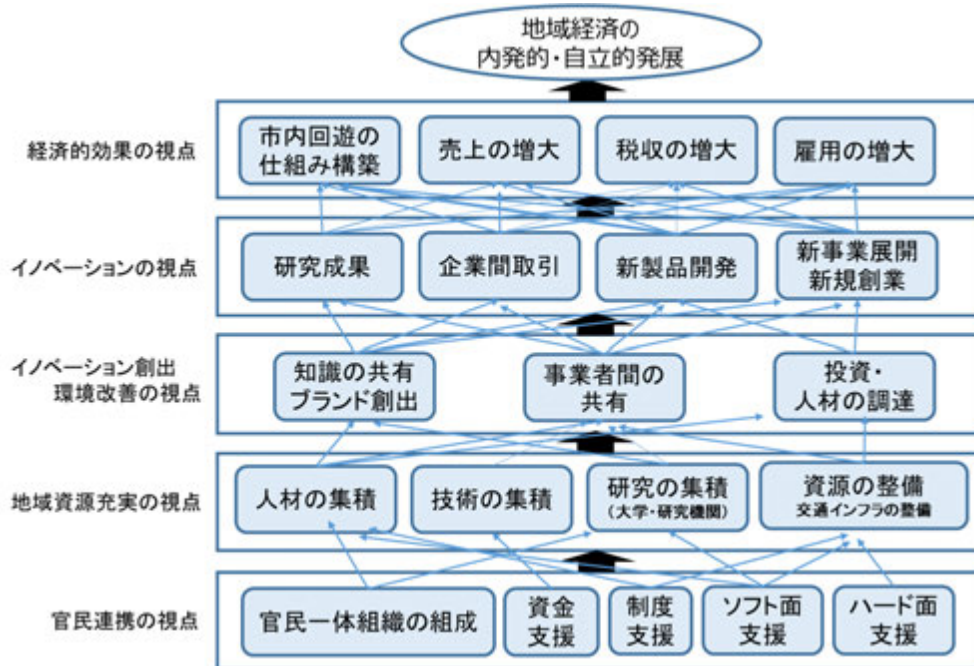
高橋（2010）は、産業クラスターが成功するための要因の一つとして、参加メンバー間のクラスターの事業目的の共有と理解を挙げている。そして、それを実現・推進する手法として、産業クラスター形成の戦略マップを作成し、メンバー間で共有することを提唱している。高橋（2010）は、「政策連携の視点」「地域資源充実の視点」「イノベーション創出・環境改善の視点」「イノベーションの視点」「経済的効果の視点」の5つの視点を用いて、産業クラスター計画の戦略マップを示している（高橋、2010、p.86）。

高橋（2010）のこのマップを活用し、「政策連携の視点」を「官民連携の視点」と置き換えたうえで、筆者がアレンジを加え、加西市における産業クラスター形成計画を作成したものが図表 19 である。

経済産業省（2006）によると、産業クラスター形成の過程では、まずは、その地域の幅広い主体が集まり、地域産業に係る戦略やシナリオを検討・作成することで、地域で共通の問題意識が醸成される。前述した、加西市における新たな官民一体となった推進組織の組成がこれにあたり、図表 19 では「官民連携の視点」でのステージがこれにあたる。そして、その組織のなかで交流が活性化されることで、地理的にも心理的にも近く、個人的な信頼関係を基礎としたいわゆる「人的ネットワーク」が生まれ、地域資源についての情報交換や事業協力が始まる。これが、図表 19 の「地域資源充実の視点」のステージに該当する。そして、こうしたネットワークが中心となって、その地域ならではの新たな価値が生まれ、それを育てていく機運が醸成されていく。図表 19 の「イノベーション創出・環境改善の視点」のステージがこれに該当する。そして、そのなかから、メンバーそれぞれが有する技術、ノウハウ、知見・知識、情報等が、縦横に絡み合うことで、知識やノウハウ等の融合が引き起こされる。更に、メンバー間や地域外との連携による新たな知的資源が資本の導入などが行われることで、異なる産業間のシナジー効果が生まれ、組織内のイノベーションが加速化され、「地域経済の内発的・自立的発展」に向かって進んでいく。この段階が、図表 19 でいう「イノベーションの視点」と「経済的効果の視点」で捉えることができる観光クラスターの完成型のイメージ

である。

図表 19：加西市における産業クラスター形成の戦略マップ



出所：高橋（2010, p.86）を参考に加筆修正し筆者作成。

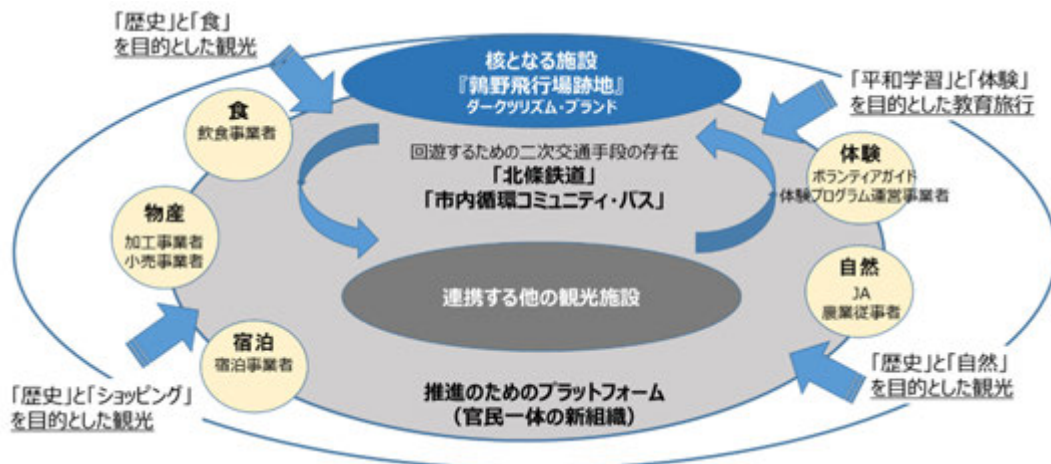
6-5. 加西市版観光クラスターのイメージ

図表 20 は、加西市における観光クラスターのイメージ図である。この図の通り、ダークツーリズムポイントである「鶉野飛行場跡地」を核として、官民一体のプラットフォーム組織が土台となり、その上に地域経済に関係する意欲ある様々なプレイヤーの強力なスクラム体制が構築される。それが、加西市の地域経済を支える観光地経営の理想形を創り出していくのである。

そのための整備条件として、①クラスター内を周遊できる仕組み（二次交通手段）を有していること、②クラスターを形成する各要素（観光施設のみならず、食、物産、宿泊、体験、自然等のすべての構成要素）が連携し、相互に情報交換を行い、時には競争する関係が構築されていること、③連携する飲食店や土産物店では、その地域ならではの「食」や「産品」を提供していること、④これらがすべて繋がらうこと、があげられる。観光クラスターの形成によって、市内にヒト・モノ・カネが廻る地域内観光（地域内回遊・周遊型観光）の仕組みが実現するのである。そして、ある場合は旅行会

社を通じて、また、ある場合は学校行事として、また個人旅行者として、「平和学習」「戦争体験」「歴史」そして、「食」「物産」「体験」を求めて、外部から人が訪れてくるのである。これが、加西市版観光クラスターのイメージである。

図表 20：加西市における観光クラスターのイメージ図



出所：筆者作成。

7. 結び

以上、本稿では、歴史遺産の中でもダークツーリズムといわれる戦争遺産に焦点を当て、ダークツーリズムにおける観光地経営の在り方を、観光分野における産業クラスター（観光クラスター）の形成によって実現できることを、特に地域内観光（地域内回遊・周遊型観光の推進）の仕組みづくりの視点から考察した。

考察にあたっては、井出（2012）が提唱したダークツーリズムにおける地域イノベーションの5段階の発展過程を活用し、まずは、その先進地といわれる鹿児島県南九州市知覧地区のダークツーリズムの発展過程を明らかにした。そして、知覧地区における観光クラスターの成立を、Porter（1998）が提唱したダイヤモンド・モデルを使って検証した。この知覧地区で用いた分析手法を適用することで、本稿の研究対象である兵庫県加西市の現状と課題について考察した。

考察の結果、加西市は未だダークツーリズムの発展途上にあり、観光クラスターの形成には至っていないことがわかった。加西市のダークツーリズムの成立要件は、多様なプレーヤーを巻き込んだ官民一体による「観光推進プラットフォーム」の形成・進

展にある。ダークツーリズムポイントの価値が地元住民や関連組織に共有され、それが地域外に発信され、定着することによって、そのポイントを核とする地域ブランドが創出される。結果、加西市独自の「観光クラスター」を形成することに繋がる。「観光クラスター」の形成は、地域内観光（地域内回遊・周遊型観光）の仕組みの実現にとって極めて有効な手段となるのである。その実現・推進には、産業クラスター形成の戦略マップを作成し、メンバー間で共有することが効果的である。

ダークツーリズムを含む歴史観光は、最も観光素材が多い分野であり、どの地域にも素材が埋もれており、観光振興を図るうえで、地域が最も取り組みやすい分野である。その一方で、扱いが難しい分野でもあり、地域の宝として長い歴史のなかで住民たちによって守られ続けてきた地域遺産を、外部の人が訪れる観光地にすることへの地元住民の反発等、避けては通れない課題もある。「風化させない」「伝えていきたい」「保全していきたい」といった地元住民が主体となって進めていく重要性がそこにあり、「観光」は目的ではなく、それを実現するための1つの「手段」として位置づけてこそ、地元住民の理解が得られる。同じことが、地域産業の活性化においても言えることで、図表17に示した通り、「観光」は、三次産業の一要素ではなく、すべての産業、そして地域全体を活性化させるための「手段」として位置づけられるのである。今回の分析結果が、全国の同種事例において少しでも役立つものとなれば光栄である。

今後の課題は、更なる事例研究の蓄積にある。本稿では、ダークツーリズムによって観光クラスター形成を実現させたと考えられる知覧地区と、それが未だ発展途上段階にある加西市との2つの事例比較による考察を展開した。しかしながら、上述のように、全国には同種事例が数多く存在し、その状況も様々であることが予想される。本稿の考察結果を他地域に適用するには限界がある。そのため、多くの事例研究を積み重ねることで、より一般化可能性の高い考察結果を得る必要がある。例えば、失敗事例の分析が挙げられる。観光クラスター形成、地域内観光（地域内回遊・周遊型観光）の仕組みの実現に積極的に取り組んだものの、結果として失敗に終わってしまったというような事例である。その他、観光クラスター形成プロセスについての考察も必要であろう。今後も研究を継続していきたい。

参考文献

- [1] Porter, M. E (1998) *On Competition*, Harvard Business School Press (竹内弘高訳「競争戦略論Ⅱ」ダイヤモンド社、1999年。)
- [2] 有馬晋作・陳 真鳴・橋口幸紘・深見聡 (2004)、「これからの観光のはなしー発展的観光論に基づいてー」、『鹿児島大学大学院人文社会科学研究所プロジェクト研究報告集』創刊号、pp.1-20。
- [3] 井出明 (2013)「ダークツーリズムと地域イノベーション」進化経済学会論集第17。
- [4] 井出明 (2012)「日本におけるダークツーリズム研究の可能性」第16回進化経済学会大阪大会予稿。
- [5] 塩谷英生、川口明子 (2004)「観光の経済波及効果を高めるための施策の体系化とその適用に関する研究< I >」釧路公立大学地域経済研究センターとの共同研究レポート。
- [6] 高橋一夫 (2017)「DMO 観光地経営のイノベーション」学芸出版社 pp.134-149。
- [7] 高橋賢 (2010)「産業クラスターの管理と会計-メゾ管理会計の構想-」 p.86。
- [8] 十代田朗・山田雄一・内田純一・伊良皆啓・太田正隆・丹治朋子 (2010)「観光まちづくりのマーケティング」学芸出版社 pp.78-99。
- [9] 深見聡 (2009)『「歴史観光」の地域政策的特性』ー観光の定義からの再考ー』地域総合研究第36巻 (第1.2号合併号)。

参考資料

- [1] 大澤健 (2017)「紀の川市観光まちづくり組織設立準備にむけて」講演会 (2017.11.02) 配布資料より。
- [2] 経済産業省経済産業政策局地域経済産業グループ (2006)「産業クラスター 第Ⅱ期中期計画」。
- [3] 地域デザインフォーラム 研究員一同 (代表 中村昭雄 大東文化大学教授) (2004)「イノベティブな板橋をつくるー現代産業集積の研究ー」 pp.51-60。
- [4] 兵庫県産業労働部観光振興課「兵庫県観光客動態調査報告書」(平成28.29.30年度版、令和元年度版)。
- [5] 南九州市「統計南九州 令和2年度版」。

参考ウェブサイト

- [1] 株式会社星野リゾートウェブサイト「星野リゾートのマイクロツーリズム」
<https://www.hoshinoresorts.com/sp/microtourism> (アクセス日 2021.7.16)
- [2] KAYAKURA 地域考察メディアウェブサイト「ダークツーリズムとは何か-日本/世界における事例」<https://kayakura.me/dark-tourism> (アクセス日 2021.7.16)
- [3] 日本経済新聞ウェブ版.2020年8月13日号
<https://www.nikkei.com/article/DGXMZO62559190S0A810C2960E00/> (アクセス日 2021.8.5)
- [4] 兵庫県県民生活課企画ネット情報誌「すごいすと」
<https://sugoist.pref.hyogo.lg.jp/interview/uetaniakio> (アクセス日 2021.8.5)

謝辞

本稿の執筆にあたり、兵庫県立大学大学院の西井進剛教授より多くの示唆とご指導を賜りました。心より感謝申し上げます。また、本研究を進めるにあたり、加西市ふるさと創造部のご担当者様、加西市歴史街道ボランティアガイドのご担当者様、鶉野平和祈念の碑苑保存会のご担当者様、近畿日本ツーリスト神戸支店のご担当者様に多くのご協力を賜りました。心より感謝申し上げます。